



宮城教育大学・教育学コース  
田端 健人 先生

博士(教育学)。都留文科大学、横浜国立大学、聖路加看護大学、東京大学等の非常勤講師を経験。2001年より宮城教育大学教育学部准教授。人間学や哲学の手法を用いて教育実践研究を行っている。著書に「詩の授業」の現象学(川島書店・2001年)などがある。

# 先生の声から考える 震災と『学校』

東日本大震災からまもなく1年を迎えようとしています。  
震災での教訓を明日へ活かそうとさまざまな取り組みが進められていますが、「学校」はどうなるのでしょうか。  
「教師たちの3・11-学校現場の記憶-」と題し、被災地の先生方に聞き取り調査を行っている宮城教育大学の田端健人先生に詳しいお話を伺いました。

## 学校を信頼する

現在行っている調査は、宮城県を中心とした被災地の小・中学校、高校の先生方を対象に、震災当日から数ヶ月間の体験を語っていただくというインタビュー形式の調査です。先生方が何を体験し、子どもたちと地域住民をどのようにケアし、どのような社会的責務を果たしたのか、その貴重な体験を記録・整理しています。被災地の先生方には共感と励ましのメッセージを送り、被災地外の先生方には、学校教諭が果たす役割や責任についてより広く深く理解していただき、今後の災害時に活用していただくことを目的としています。

調査にご協力いただいている先生は十数名。ですから一人ひとりの先生の声を中心にするスタンスで、量と言うよりも質的な内容になっています。先生方の地域や立場もさまざまで、体験も千差万別ですが、調査全体を通して感じたことは、先生方の機転と行動力により、多くの子どもたちと地域の方々が救われたということです。  
一部の学校管理下での惨事がクローズアップされ、学校という場所は批判されがちですが、圧倒的多数は、学校にいたからこそ助かっていたことがわかりました。それは数値にも出ています。

ですから、学校という場所を信頼して、学校の判断を認めてあげる。幼稚園もそうです。保育所や子ども園についてはまだ手元にデータがありませんので断言はできませんが、お母さん方には「学校はかなり安全だ」ということを知っていただきたいです。

また、先生方の生の声を聞いて驚いたのが、子どもたちは地震や津波を怖がって泣く、混乱するというよりも、お母さん、お父さん、きょうだいを気にする。我が身よりも家族のことを心配して泣いていた子が多かったということ。この事実もお母さん方にぜひ知っていただきたいです。先生方は、あなたが大丈夫じゃなければ、お母さんも心配するよと話して学校の指示に従うように指導したそうなんです。だから、日ごろから、親御さん方が「私は大丈夫だから」としっかりお子さんに伝えておくことも大事なのではないのでしょうか。

調査を進めてみますと、岩手県釜石市という地域はやはり特別だったと思いますね。学校外にいた小中学生の避難率が100%で、避難の成功例として「釜石の奇跡」と言われています。これは群馬大の片田敏孝教授(災害社会工学)と釜石市と学校が協力し合って、数年前から防災教育、訓練を徹底していたからこそ。学校で習得した防災教育や訓練を家庭で伝える、また、僕は僕で逃げるから、お母さんはお母さんで逃げて、といった共通理解があったことが、功を奏したんだと思います。

震災をきっかけに、改めて家族でコミュニケーションをしっかりと図ることが必要なのではないかと思いますね。



## 学校の力、先生の力、子どもの力

今回の震災ではデータ的に見ましても「学校」が果たした役割は大きかったと思います。「安全な場としての学校」という認識も今後は定着してくるでしょうし、それにもなって行政や地域とどこまで役割分担をするかというすり合わせも必要になってくるかと思えます。

学校の対応能力は限られています。避難所の管理運営など、当面は先生方が対応しても、行政や地域本部に移行するのが本来のあり方です。しかし震災では、地域本部が立ち上がらなかつたり行政も手いっぱいというケースがあり、現場の先生方は本当にご苦労なさったようです。

聞き取りをしていますと、先生たちって本当に頑張るんですよ。教育者として子どもたちを守るのももちろんですが、「地域の中の学校」だからと地域のために黙々と頑張っていました。仙台市内のある小学校では、多数の帰宅難民が押し寄せて、それを先生方が切り盛りしたんですが、想像を絶するような体験談でした。

それに毛布が足りないとなれば、カーテンで代用する。おむつがないときも給食着などで簡易版を作る。紙コップがないからプリント用紙を折って作る。先生方はそのようなことまでできるのかと非常に興味しましたね。たくさんの人たちが来たら色分けをしてグループ化する、管理する。中には子どもの靴のサイズまで把握していた先生もいたそうです。つまり先生たちは大きなところから細かなところまで対応できるのです。これは日ごろから子どもたちを個々で、集団で、対応しているからこそ。「先生」という職業は、やはり専門性と能力が高いんだなと改めて感じました。

今後も今回のように避難所の運営まで学校が担うことになるのであれば、それなりのマニュアルや訓練、研修、補償などいろいろな面を充実しなければならないと思います。

また、先生方が口をそろえておっしゃっていたのが、情報が伝わってこなかったということと、子どもたちが学校外にいる時に災害が起きた場合はどうするのかということ。登下校の途中、塾や習い事へ向かう途中に何かあったら…。これがとても難しいんです。この部分を重点に置いた防災教育も考えていかなければならないと思います。

家庭でも同じことが言えます。精神的に震災と向き合うことがお辛いというご家庭もあるでしょうが、もう大丈夫だというお宅では、いち早く防災マップを作っていたか、ここに行くよ、お母さんはここで待ってるよ、という風にお互いの行動を確認してみてください。遊園地で楽しむのもいいですが、地図を囲んで防災を考える、シミュレーションすることも十分に実りのある休日の過ごし方なのではないでしょうか。もしかすると、「うちの子はこんな風に考えているのか」とお子さんの意外な一面を発見できるかもしれませんよ(笑)。

意外、と言え、震災時に子どもたちの意外な面を知ったという声も聞きましたね。子どもたち同士が励まし合ったり、避難所では大人に混ざって積極的にお手伝いをしたり。子どもたちはいつも明るく、しっかり振舞っていたと。その姿を見て地域の大人たちが励まされ感銘を受けたと、たくさん聞きました。そしてふだんは頼りなさそうに見える子どもでも、実はこんな力を秘めていたのか、その力を教育現場でもっともっと引き出してあげたいと、多くの先生方がおっしゃっていました。

あの震災からまもなく1年を迎えますので、これらの貴重な声をいったんまとめるつもりです。そして今後も継続的に研究していき、危機管理に関する学校や行政のシステム改善に役立てていただきたいと思っています。

